

室戸台風復興橋梁 ローゼが9連並ぶ

お お は ら 大 原 橋



晴れの国岡山といわれる地域ですが、岡山県で記録に残る自然災害としては、室戸台風が最大のものといわれています。昭和9年（1934）9月21日、フィリピン沖で発生し高知県の室戸岬に上陸した台風は上陸時の最低気圧は911.6hPaで、中国、近畿地方を通過して日本海へ進み、西日本各地に被害を与えました。これは現在に至るまで日本本土に上陸した台風の中では最強のものでした。

この時の岡山県における被害は、風による被害よりも、台風が通りすぎた後に甚大な水害を起こしたものでした。台風がもたらした大量の雨は高梁川・旭川・吉井川を中心に大洪水となり、岡山市街地も浸水、日本三名園の後楽園でさえも水に浸かってしまうという、未曾有の被害を出しました。

建物全半壊4,560棟、死者145名、負傷者348名、冠水面積19,790haで、風速は測定できたもので60m/sに達し、全国各地で建物の倒壊が起こり多大な被害が出ました。

岡山県内の復旧橋梁の形式選定にあたっては、木橋からコンクリート、鉄の永久橋にする、また幅員は5.5mに拡大して将来の交通需要にも対応できるもの、特に橋長70m以上の者は鋼製とされました。

岡山市玉柏から牟佐^{むさ}に向かう県道が旭川を渡る地点に架けられている大原橋は、長さ430m余りの橋です。以前の木橋が流されたため、昭和11年に復旧工事が始まり、総工費28万円をかけて昭和17年にようやく完成しました。

1連の鋼製トラス橋に9連の鉄筋コンクリートローゼ橋が連なる珍しい形式の橋です。もともとの計画では、全て鋼橋を架ける予定でしたが、太平洋戦争の勃発で鉄不足となり、コンクリートに変更されたともいわれています。同時期に県内で架けられた復興橋の多くがこの形式です。

ローゼと呼ばれるこうした形の橋が9つ連なるのは、戦前のものとしては日本一で、旭川に架かる400mあまり続くシンプルな流れるような曲線は、見事な美しさです。

■位置図



大原橋の鉄筋コンクリート部



大原橋コンクリート部



大原橋鋼製トラス橋



鋼製トラスと9連のコンクリートのアーチが並ぶ大原橋